

他者への化粧行為と雑談

Makeup on someone else and talk with them

天谷 晴香[†]

Haruka Amatani

[†] 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

amatani.haruka@gmail.com

Abstract

When applying a makeup on someone else than oneself, there may be many findings to the makeup-doer on its processes, especially if they are not professional. Analysing the video with a daughter doing her mother's makeup, I found trial-and-error moments which ended up leading better consequences. What is interesting about these trials is that timing of utterances and hand movements appeared to be carried out very carefully toward the makeup-doe. There were delays of utterances and hesitation of hand movements in association with long gazes. The carefulness of the makeup-doer will be argued with conflict between two activities in multiactivity and also with creativity of makeup through trial and error.

Keywords — Multiactivity, Multimodality, Makeup

1. はじめに

化粧行為の結果として、いつも予測通りの仕上がりが得られるわけではない。特に慣れない他者への化粧では、各行程において予測外の結果が得られることが多い。予測外の結果に対して化粧行為者は、化粧品や化粧道具、方法を変更することで対応していく。その際、行為者はタイミングを見計らって被行為者の同意を得ながら当初の計画を修正していく。

他者への化粧行程において行為者は、好ましい結果に対しては反応しやすい。好ましくない結果に対する反応については直接的な言及は避けられる。被行為者の感情を害することなく結果を報告するため、行為手は間を測る。

被行為者の感情に考慮して施術者が間を測る場面を分析した先行研究に、[1]がある。[1]では、美容サロンにおける眉脱毛の施術場面をビデオ分析している。次の行程に移るのにクライアントの協力が必要だが、クライアントが雑談を続けているためそれを無理に中断しないように、施術者の手や視線は、宙に留まったり、同じ場所を複数回行き来したりした。

プロのサロンに限らず、素人であっても、感情に配慮しようとする行為者の姿勢は変わらない。また、[1]が主張するように、プロの施術で用いられる「感情労働」は、日常の人間関係の構築において各人が自主的

に行っているものである。

特定の活動を行いながら、雑談を行うことは非常に日常的な行為である。マルチアクティビティ（複合活動）について、[2]は複合活動における各活動が並行して進行したり、一方が他方に埋め込まれたりしながら、全体で複合活動を形成していると述べている。

他者に行う化粧行為は、魅力的なメイクに到達する目的がある一方で、雑談を行いながらその場の人間関係を快適に保つことも重要視される点である。このため、化粧と雑談の複合活動においては、基本的に化粧が雑談に優先されるものであるが、場面によっては雑談が化粧に優先される。例えば、雑談の切れ目を待って化粧が次の行程に移るなどである。[1]が「感情労働」と呼ぶものは、このような複合活動内の各活動の調整時に生じていると考えられる。

2. 方法

2.1 データ

一方が他方の化粧をしている参加者2名の発話と行動を記録、分析した。2名は母と娘で、娘が母に化粧を行った。ビデオは全体で約28分30秒のうち、今回報告するのは、開始10分から始まる約3分30秒の抜粋部分である。

2.2 化粧動作アノテーション

化粧動作をタグ付けする際、ジェスチャー単位([3][4]ほか)を援用した。化粧動作の最も大きな単位である化粧動作ユニットは、化粧行程のひとつに相当するものとする。例えば「眉を描く」「口紅を塗る」などである。

本分析において受容な化粧動作の単位は、化粧動作ユニットである。化粧動作ユニットを構成するものに化粧動作句、さらにその下位に化粧動作区間がある。これらの、よりミクロな単位は化粧動作ユニットの境界を決定する時に参照される。

2.3 視線アノテーション

視線のアノテーションには、[5]に基づき、2種類のタグを用いた。移行区間と安定区間の2つである。移行区間は視線が対象に向かって動き始めた時点から視線が留まるまでの区間であり、安定区間は視線が対象に留まっている区間である。

本研究において視線が重要になるのは、参加者が施した化粧の出来を確認する場面である

2.4 発話アノテーション

化粧行為中の発話は日本語話し言葉コーパス(CSJ)における転記基準を採用した。会話データ中の「:」は長音、「%」は撥音、「(L)」は笑いを表す。また()内の数字は無音区間を示し、単位は秒である。

以下に、データの抜粋部分(10分02秒~13分28秒)の発話を示す。Dは娘で化粧行為者、Mは母親で被化粧行為である。

- 01D で こっちが チーク。
 02M 今のは何やったっけ。
 03D 今のもチークやけど。
 04D ま こことかも コンシーラーする人いる。
 05M ふーん。
 06D なんか 鼻の赤みを消すとか。
 07M ふーん。
 08D そういう派の人 コンシーラーいっぱい使う派の人と
 09M うん。
 10D なんか その
 11D スキンケアで で 美肌を目指しましょうっていう
 12<1色目のほお紅を塗り始める>
 13M うん。
 14D だから: そういうコンシーラーとかあんまり使わんでも元の肌をきれいに。
 15M うん。
 16D なるといいねっていう。
 17M ふーん。
 18D とかいう(L ね)。
 19M (8.44)
 20M うちの職場のすごいきれいな人。
 21M すごいきれい。
 22D うん。
 23M お化粧も相当 上手なんだと思う。
 24D うん。

- 25D 何歳ぐらいの人?。
 26M 三十代後半で
 27M CA してはったって。
 28D ふーん。
 29M CA じゃないか。地上 地上業務員?。
 30D やってる友達いる。
 31 (10.46)
 32M うん。
 33M すんごいきれいな人。
 34M コンシーラーいっぱい使ってはりそう。
 35<1色目のほお紅を塗り終える>
 36D あー。(L)
 37D ほうやろうね。
 38D 気にしてやると思う。
 39M まぶしくて よく見れない。(1.96)顔。
 40M きれいやな%と思って。(0.64)きれいやなと思って。
 41M よく見れない。まじまじと。
 42 (10.33)
 43D 眉毛を描きます。
 44<眉を描き始める>
 45D まあ あんまりまじまじと見ても あれやけどよ。
 46 (23.82)
 47M うん。
 48 (24.65)
 49D あんま 変わんないね。
 50M うん。
 51D この カクッてなってるのは そういうふうに生えてるん?
 52M 生えてるんよ。
 53M ほれを取ったらってゆわあるけどな。
 54D うん。
 55M うーん。
 56M ほれ取ったら間が持たんのよね。顔が。(L)
 57D うん。
 58M アクセントなのよね。
 59D うん。
 60M はしっこ ここ こうね。カクッてなってるやろ。
 61D うん。
 62<眉を描き終える>
 63D これ描きすぎると眉毛犬みたいになる。
 64D (L)
 65M (L)
 66M 口紅 自分が出そうか。

- 67D うん。
 68D ほうやな。
 69D チークもお母さんのピンクのやつの方がいいかもしれん。
 70M うん。
 71M じゃあ 出そうか。
 72D うん。はい。
 73M それも色はいいんやけど すごくちょっと白っぽいんよ。
 74M あんまりつかないのよね。
 75 <2色目のほお紅を塗り始める>
 76D うーん。
 77D おてもやんみたいになってしまう。お母さん。
 78M うん。
 79 <2色目のほお紅を塗り終える>
 80D やっぱり 自分に似合う色えらんでやーるんや。
 81M (うなずき)
 82D (うなずき)

3. 分析

データの抜粋部分に伴う化粧行為は、最初にはほお紅を塗ってから、眉を描く行程を経た後、ほお紅の色を変えて塗り直し終えるまでの過程が含まれている。

3.1 で、最初のほお紅の色に対する評価発話が遅れて現れていることを示す。

3.2 で、評価発話の遅延を、雑談と化粧行為の境界の不一致の観点から論じる。

3.3 で、評価発話の遅延を、化粧行為における試行錯誤と創造性の観点から論じる。

3.1 評価発話の遅延

最初のほお紅を塗布したあと、出来について言及しない。行為者の視線は対象部位を見ているが、被行為者がしている話題にあいづちを打って 36 行目で「あー」と言いながら笑い、出来に関する発話をせずに、次の眉を描く行程に移行している。

行為者が次にほお紅について切り出すのは、その時点から約 1 分 45 秒後のことである。眉を描く行程が一通り終わった際に、被行為者から 66 行目に「口紅、自分の出そうか?」という被行為者所有の化粧品への言及があったことに乗じて、描き終わった眉を右手でさわりその直後に左手で両頬を交互にさわりながら 69 行目の「チークもお母さんのピンクのやつの方がいいか

もしれん」と発話する。この時、視線はさわっている頬に向かっていている。

2色目のほお紅をつけた後、80行目の「やっぱり自分に似合う色を持ってやーるんやな」とその色が似合うことと最初のほお紅が合っていなかったことを示唆する発話している。

発話以前に、結果を確認する視線が主に2度の区間に分かれて見られる。発話は2度目のあとに行われている。2度目の確認は、視線や顔だけでなくからだ全体を使って大きく行われ、これは被行為者の注意を引くための動作であると考えられる。行為者は上体を大きく逸らして、被行為者の顔を凝視している。

3.2 雑談と化粧行為の境界の不一致

ある化粧行程の望ましくない結果に対して、化粧行為者は直接的な言及を避け、被行為者にすぐに伝えることをしなかった。中期的な時間軸をもって、望ましくない結果を回復する方策を探っている様子が伺える。

まず、4行目から18行目までのDの語りに対するセカンドストーリーとして、Mは20行目で「職場のすごいきれいな人」に関する語りを始めている。この語りの途中でDは最初のほお紅を塗り終えている。この時点で、Dはほお紅の色があまりMの肌の色にマッチしていないことに気づいているはずだが、その評価を発話で示していない。この評価は、80行目の「やっぱり自分に似合う色えらんでやーるんや。」でようやく婉曲的に示される。

この遅延のひとつの理由は、35行目でDが1色目のほお紅を塗り終えてからも、Mの語り41行目まで続くことにあるだろう。Mの語りが続いているため、Dはほお紅の色に対する評価をするターンを得られずにいる。ここに、雑談の境界と化粧行為の境界の不一致が見られる。不一致のために、うまく評価のターンが得られていないと考えられる。

3.3 化粧行為における試行錯誤と創造性

遅延のもうひとつの理由としては、35行目で1色目のほお紅を塗り終えた時点では、Dは望ましくない出来に対する対応策を持っていないということにあるだろう。66行目でMが自分の口紅を持ち出す提案をした時にはじめて、Dは、ほお紅についてもM所有のものをういれば望ましい出来になるのではないかという案を得たと考えられる。

この例は、試行錯誤がよりよい結果に結びついた例

である。別の選択肢の可能性が提示されたために、行為者は望ましくない出来を修正する機会を得ている。一方で、その化粧行為中に、回収されない望ましくない出来も複数あると考えられ、それらについては発話で表現されることなく、望ましくないまま最終の出来を迎えていると考えられる。

4. まとめ

本稿では、他者への化粧行為中に生じた、ある行程への出来の評価発話の遅延の例を挙げ、複合活動における各活動間の境界の不一致について論じた。また、成功した試行錯誤という観点から同じ例を分析した。

他者への／による美容行為は、よい出来に仕上げ目的が最優先事項としてある一方で、行為途中で行為者と被行為者の関係性が良好に保たれる必要も大きい。[1]は、行為者の関係性構築能力の高さが、プロの美容サロンがクライアントに選択される大きな条件になると述べている。素人による美容行為は、素晴らしい出来になることは当初からプロほど期待されていないために、さらに関係性を保つ会話が重視されるだろう。このように複合活動は、その参加者の性質や目的に応じて、各活動間の優先度合いが変化する。

日常的な関係性維持の方策が見られる、会話を伴う複合活動としての他者への化粧行為を今後も分析していきたい。

参考文献

- [1] Toerien, M., & Kitzinger, C. (2007). Emotional labour in action: Navigating multiple involvements in the beauty salon. *Sociology*, 41(4), 645-662.
- [2] Mondada, Lorenza. (2011). The organization of concurrent courses of action in surgical demonstrations. In Streeck, J., Goodwin, C., & LeBaron, Embodied Interaction: Language and Body in the Material World (pp. 207-226). Cambridge University Press: Cambridge, U.K.
- [3] Kendon, A. (2004). *Gesture: Visible Thought as Action*. Cambridge University Press: Cambridge, U.K.
- [4] 細馬宏通. (2008). 非言語コミュニケーションのための分析単位-ジェスチャー単位-. 『人工知能学会誌』, 23(6), 390-396.

- [5] 菊地浩平. (2011). 視線アノテーションマニュアル.